

高知工科大学 経済・マネジメント学群

2025 年度 卒業論文

日本人の食事共有場面における

遠慮行動に関する研究

指導教員氏名 小林 豊

学生氏名 稲田 夏美

日本人の食事共有場面における 遠慮行動に関する研究

稲田 夏美

指導教員 小林 豊

研究背景

複数人で大皿料理を共有する場面では最後の料理に手を伸ばしにくい「遠慮のかたまり」現象がしばしば生じる。本研究は、人数、相手との親密度、料理の残量が料理を取る意図に与える影響に着目し、これらの要因の効果を検討した。

研究目的

ウェブアンケートにより、以下の2つの仮説を検証する。1つ目は、人数が少ないときより多いときのほうが残り少なくなった料理に手を出しにくいという仮説である。2つ目は、この効果が親しい友人であるときよりも、知り合っていない相手であるときにより強く表れるという仮説である。これに加え、同調性・遠慮傾向という個人特性が「取りにくさ」に与える影響を明らかにすることも目的とした。

研究方法

204名を対象にウェブアンケートを実施し、人数×親密度×料理量の2×2×2の計8条件を被験者内計画で提示した。各条件について料理を取って食べたい度合いを7件法で測定した。加えて、同調・遠慮に関する6項目尺度を作成して因子分析により「同調遠慮スコア」を算出した。また自由記述によって「遠慮のかたまり」状況における具体的な対処行動も収集した。条件が「料理の取りやすさ」に与える影響を、個人差を考慮しつつ分析するために混合効果モデルを当てはめた。

分析結果

料理の残量が少ないほど、また相手が初対面であるほど料理を取りにくいことが確認された。人数の主効果はみられなかったが、「残り1個」と少ない場合に限り人数が多いほど取りにくさが増大した。さらに、同調遠慮スコアが高い人ほど料理を取りにくいと感じ、女性の方がやや遠慮しやすい傾向も示された。自由記述では、確認・遠慮・譲渡といった他者配慮的な回答が多数を占めた。

考察・結論

「遠慮のかたまり」は単なる消極性ではなく、周囲との関係や集団の雰囲気考慮した協調的な意思決定行動であることが示唆された。また、それは人数や親密度といった状況要因だけでなく、個人の性格特性も含めた複数の要因の組み合わせによって説明される現象であることが示唆された。